

【実践報告】

保育士等の自己評価の実践 —「自己評価チェックシート」の作成と実践—

石川 昭義, 平木 美紀子

【要約】本稿は、「保育所保育指針」第1章総則を踏まえ、「保育士等の自己評価」を実施した仁愛保育園（福井市）の実践の記録である。園内研修では「保育所における自己評価ガイドライン（2020年改訂版）」（令和2年3月）を読むことから始め、具体的な自己評価項目の作成に取り組んだ。最終的に、34の評価項目及び105の評価の着眼点を設定した。作成した自己評価チェックシートによる自己評価後の保育士の感想では、評価項目や着眼点に照らして自分の言動や行動の振り返りができたこと、自身の新たな気づきや目標設定につながった等の良い意見があった一方で、作成に携わらなかった職員にとっては理解できる言葉だったのだろうかとの疑問を呈する感想も見られた。園内研修では、評価をめぐる課題の解決に向けて、職員相互の対話の継続が大切であることを確認し、それを通じて自身の評価の位置づけを見直していくこととした。

キーワード： 保育所保育指針, 保育士等の自己評価, 自己評価チェックシート, 振り返り

1. はじめに

仁愛保育園（福井市）では、常勤保育士を対象とした園内研修を定期的に行っている。令和元年度と令和2年度の園内研修では、これまで使ってきた保育課程を修正して、新しい全体的な計画の作成を行った。その書式には、保育の理念や方針、保育の特徴、園として取り組む事項を記載したほか、「保育所保育指針」（以下、「指針」と言う。）に沿って乳児保育の3つの視点のねらい、1歳以上の5領域ごとのねらい、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を記載した。具体的な保育内容（経験すること）は年齢ごとの年間指導計画で表現する方式をとり、年間を通じて、保育内容の展開と環境構成との関連がわかるようにした。

その後、令和2年12月から、「指針」が示すところの「保育士等の自己評価」の実施に向けた園内研修を始め、おおよそ2か月に一度のペースで開催した。本報告では、全体的な計画の作成の後、「保育士等の自己評価」を踏まえながら「保育士等の自己評価チェックシート」の作成に取り組んだ経過や自己評価を実施した後の保育士の感想等についてまとめる。

2. 保育士等の自己評価の作成に向けた園内研修

(1) 保育士等の自己評価の意義

平成29年3月告示の「指針」第1章総則「3 保育の計画及び評価」では、全体的な計画の作成

及び指導計画の作成が遵守事項とされた。それと連動して、「保育内容等の評価」として、「保育士等の自己評価」と「保育所の自己評価」が努力義務とされた（「指針」第1章総則）。

全体的な計画の作成，指導計画の作成，指導計画の展開，保育内容等の評価，評価を踏まえた計画の改善という一連の取組，いわゆる PDCA サイクルを適切に運用することは，保育の質の向上を図るためであり，ひいては子どもの最善の利益のためである。

「保育所における自己評価ガイドライン（2020年改訂版）」（令和2年3月）⁽¹⁾（以下、「ガイドライン」と言う。）では，次のように保育内容等の評価の目的と意義が説明されている。

（2）保育内容等の評価の目的と意義（「ガイドライン」p.4より）

○保育内容等の評価は，子どもの豊かで健やかな育ちに資する保育の質の確保・向上を目的として行われます。保育の過程の一環として，継続的に実施されることが重要です。

○保育内容等の評価の意義：

- ・保育士等が，子どもに対する理解を深め，保育の改善や充実が図られること
- ・職員の資質・専門性の向上と職員間の相互理解や協働が図られること
- ・評価結果の公表等により，保育所と関係者（保護者等）の間で子どもや保育についての理解が共有され，両者の連携が促進されること

「保育士等の自己評価」は，文字どおり個々人による評価である。それは，日頃の自分の行為や言動を振り返ることである。そして，自分の保育が園が掲げる保育の目標の達成に資することになっているかどうかを自己判断する評価である。これらに関しては，次のような見解も示されている。

「保育者は保育の計画と記録から，自分の保育実践を振り返ります。子どもの活動内容とその結果から子どもを評価するのではなく，その計画や活動が本当に子どもの育ちにつながっているかどうか，あるいは自分の関わり方はどうだったのかなど，自分の保育と計画を評価します。日々の振り返りと保育者同士の話し合いなどを通じて，今の保育の課題を知り，これからの保育の質を上げていく努力をしましょう。」⁽²⁾

保育士等の自己評価の過程で重要なのは，「子どもに対する理解を深める」という点である。『保育所保育指針解説』では，「自己評価における子どもの育ちを捉える視点」において，「発達の個人差」「内面の育ち」「生育歴や保育歴」などの言葉が使われ，一人一人の子どもの理解，しかも「より多角的に理解する」ことが求められている⁽³⁾。すなわち，保育士等の自己評価は，一人一人の子どもの理解と自分の行為を結びつけながら，あるいは子どもの成長に向き合いながら自分の行為を評価していくことであるといえる。

(2) 保育士等の自己評価チェックシートの作成過程及びチェックの実践

1) 評価の項目と着眼点

仁愛保育園の「保育士等の自己評価チェックシート」（以下、「自己評価チェックシート」と言う。）は常勤保育士が作成することにした。作成にあたり、まずは、園内研修において、「ガイドライン」を読むことから始めた。

「ガイドライン」では具体的な評価項目や評価方法が示されているわけではないことから、どのような内容でどのように行うかから検討しなければならなかった。すでに市販されている書籍も参考にした⁽⁴⁾。

福祉サービス第三者評価基準の評価方法では、評価項目ごとに複数の着眼点を設定している。そこでは着眼点の一つ一つは「～している」・「～を行っている」の表現が使われており、それができているかどうかを評価員が書類や聴き取りを通してチェックするやり方がとられている。

仁愛保育園の自己評価チェックシートの作成にあたっては、それとほぼ同じやり方を取り入れることとした。ここでの自己評価は第三者評価と違い、それをやっているかどうかは自己の言動や行動の振り返り、あるいは日頃の意識にもとづく自己判断である。

表1のように、評価の柱となる【基準】を5つ設定し、基準ごとに評価項目を複数設定し、計34の項目を設定した。さらに評価項目ごとに着眼点を3、4個設定し、全部で105の着眼点で振り返りを行うことにした。評価の基準については、「指針」を踏まえるとともに、保育所の社会的役割及び仁愛保育園の全体的な計画におおむね沿った構成とした。自己評価チェックシートの書式は本稿末尾に【資料】として掲載している。

表1 仁愛保育園の自己評価チェックシートの構成

	評価項目	着眼点
【基準1】 保育の理念・方針について	5	16
【基準2】 指導計画について	3	9
【基準3】 保育内容及び環境の構成について		
<全年齢に共通する項目>	6	19
<乳児保育>	3	9
<3歳未満児の保育>	4	12
<3歳以上児の保育>	5	15
【基準4】 子どもの健康と安全	4	13
【基準5】 子育て支援・家庭との連携	4	12
計	34	105

2) 評価（チェック）の方法

評価は以下の手順で行うこととした。

①保育士は着眼点に照らして自分の行動や言動を振り返り、評価項目ごとに4段階（ABCD）で

評価する。

- A よく当てはまる …着眼点がすべて○
- B やや当てはまる …着眼点の1つが×
- C あまり当てはまらない …着眼点の2つが×
- D ほとんど当てはまらない …着眼点のすべてが×

- ②これを年に2回行い（令和4年度は11月に1回実施），一人一人の保育士等の評価結果を集約して，評価項目ごとの評価の傾向を把握する。
- ③評価の傾向を職員で共有し，意見交換を行い，自分たちの保育の良さを確認するとともに，課題については今後の改善に向けて話し合う。
- ④1年度分の保育士等の自己評価及び保護者アンケートを踏まえ，組織の自己評価を行う。

3) 作成過程の検討課題

評価項目や着眼点は多くすることも少なくすることもできたが，保育者の負担も考慮し，また，今後実践を重ねて再検討するという余地を残して，これらの数に落ち着いた。すなわち，細かくするとわかりやすいが数が多くなってしまう，逆に数が少ないと付けやすいが抽象度が高くなって言葉の解釈が曖昧になるというジレンマの中で，適度な着地点を求めた。特に，着眼点の設定では，わかりやすくしようと思うとどこまでも細かくなってしまうことから，ルーティーンとなっていることは省略してもいいのではないかという意見や最低限自分たちがチェックしておきたい，あるいは大事にしたい着眼点を精選してはどうかという意見が出された。

また，文末の表現をどうするかも検討課題となった。文末を「～している」・「～を行っている」とすると，自己判断は，それを「しているか／していないか」となる。文末を「～を心がけている」とすると，できているかどうかは問わずに，そのような気持ちをもって行動しているかどうかの自己判断となる。同じように，文末を「～するよう努めている」とすると，できているかどうかは問わないことになる。結果として，園としても個人としても，適切にやらなければならないことは「～している」・「～を行っている」の観点から評価することとして，そうでないところは，努力義務的な表現にした。

また，評価項目や着眼点の中に，複数の行為（要素）が含まれていると，どちらの要素を重視してよいか迷うという意見も出された。これを完全に解消することはできなかったことから，今後の実践の中で解決しなければならない課題として残されている。

3. 保育内容の評価をめぐる検討

(1) 子どもの主体性を尊重する保育をどのように評価するか

園内研修における議論のなかで，まとめるまでに苦労した一つが，【基準3】（保育内容及び環

境の構成について)に関わる評価項目である。

ここでは、まず全年齢に共通する項目(6項目)を設定し、年齢区分ごとに「乳児保育」(3項目)、「3歳未満児の保育」(4項目)、「3歳以上児の保育」(5項目)を設定して、それぞれの担当者が回答するようにした。

年齢区分ごとの項目は、その年齢の保育で特に大切にしたいと思う項目に絞り、さらにその項目に対して留意したいと思うことを着眼点にした。

仁愛保育園の「全体的な計画」の中で、保育の理念の一つとして掲げているのが「子どもの主体性の尊重」である。これは、園が保育理念に掲げる仏教の精神とともに自分たちが大事にしたいと思っている方針であり、これを評価の項目に掲げることが必要との認識を共有した。しかしながら、この方針が具現化された姿はどのようなものかについてはすぐに説明ができなかった。つまり、子どものどのような行動に「主体性が発揮されている」と認めるのか、あるいは、どのような保育者の関わり方や姿勢がそこに求められるのかということについて共通理解を図る必要があった。

園内研修で検討を重ねた結果、末尾【資料】に示す着眼点を設定することとなった。ここでは、設定型・一斉型の保育形態をとる活動であっても、子ども自らが「選ぶ」という場面をどこかで作るようにしようということを保育士同士で確認することができた。また、子どもの主体性を尊重するということは、子どもながらに時間を要する活動になるだろうとの予測のもと、保育士の指示が多くならないようにしよう、追い立てるようなことはしないでおこうと、その留意点も確認した。さらに、言葉だけでなく、カードや実際の事物を示しながら説明することで、子どもが見通しをもって行動できるようになることに「主体性」を見出したいという職員の気持ちを反映させた。

(2) 5領域の保育をどう評価するか

先述のとおり、仁愛保育園の全体的な計画では、乳児保育の3つの視点のねらい、1歳以上の5領域ごとのねらいを示しているが、ねらいの一つ一つが十分に達成されたかどうかを直接的に評価する項目は設けなかった。

【基準3】の全年齢に共通する項目(6項目)では、主体性の尊重のほかに、発達の特性に応じた保育、子どもとの信頼関係、基本的生活習慣やきまり、他の保育士等との意見交換、異年齢の子ども同士の交流を評価項目に設けた。

また、3歳未満児の保育では、探索活動、生活習慣の自立、友達への興味関心を重点とし、3歳以上児の保育では、友達との協力、知的な興味や関心の高まり、友達とのかかわりの深まり、豊かな心とたくましい体などの項目を設定し、それぞれに関連する着眼点を用意した。5領域については、保育士は、週や月の指導計画の振り返りを通じて、保育のねらいや内容の達成状況を確認していることから、それらを踏まえながらこれらの評価項目を付けることにした。

ここでの保育内容の評価については、さらなる検討が必要と考えられる。「指針」では、保育の内容は、「保育士等が援助して子どもが環境に関わって経験する事項」である。したがって、それを経験したかどうかは判断できるし、そのような環境構成を心がけたかどうかは保育士の気持ちの中で判断はできる。しかしながら、それらの結果として5領域のねらいが達成されたかどうかを判断するのは容易ではない。ねらいは到達目標ではなく、当然のことながらテストの点数で評価することもできないからである。今後着眼点の見直しを積み重ねていく必要がある。

4. 自己評価の実施についての保育士等の感想

仁愛保育園の保育士は、この自己評価チェックシートで自己評価を行った（令和4年11月）。保育士の話では、評価を付けるのに15～20分かかっており、さほど大きな負担には感じられていない様子であった。実施後に保育士等の感想を文章で出してもらい、それをもとに園内研修で話し合った。表2は感想の一部である。

良かった点は、自園の理念・方針と自分の保育とのつながりの確認ができたことであり、評価項目や着眼点に照らして自分の言動や行動の振り返りができたことである。同じ感想が多くあり、思うことは同じだと受け止めた保育士が多かった。特に目立ったのは、環境構成が不十分ではないかという自分の思い、子どもが主体的に行動できるようなクラス作りを工夫したいといった思いであった。これらは、保育士の新たな気づきにつながり、次への改善への気持ちを誘発した。

表2 自己評価後の保育士の感想（抜粋）

- ・着眼点を読んでいると、作成時にどんな思いでその言葉遣いにしたのか思い出し、具体的なのでわかりやすかった。着眼点が分かりやすい言葉と内容だと改めて思った。作成に携わったことで文章の背景にある内容（話し合いの過程）も思い出すことが出来た。
- ・子どもの知的興味や関心が高まるような環境の工夫や働きかけ、保護者支援など自分なりに心掛けている事もあるが、本当に出来ているかBかCかと迷う部分もあった。迷うところが自分の足りない所だと思うのでその部分を重点的に意識しながら保育していきたい。
- ・保育指針をもとに作ったので保育指針を読み返すきっかけにもなると思う。
- ・研修で「自分達の良さを見つける観点が重要」とよさを見つけることが自己評価でもあるとのことだったが、ついついできない事に目を向けがちになる。ここはできているから続けていこう、ここは弱いから今後意識していこう、というような捉え方をしていきたい。
- ・職員全員が自己評価表をチェックすることで、理念や方針、子どもへのかかわり方など、基本的なベースが統一されていくように感じる内容になっている。
- ・保育に悩んだり迷ったりした時に読み返すことで、原点に戻って見つめ直すことが出来る内容にもなっている。
- ・一つ一つ項目等を読みながら、日々の自分の保育を思い出したり、保護者からの意見を思い返したりして、うまくできていない部分や新しい課題に気付くことができた。じっくり振り返りが出来た。
- ・主体性を尊重する関りや環境の設定は、心がけていてもなかなかうまくできないことが多く、自分の中の課題だと感じた。
- ・携わっていない職員にとって、理解できる言葉だったのか気になる項目があった。例えば乳児保育1-③
- ・自分達の理想の保育を再確認できたり自己肯定感が上がったりして良いのだが、高評価になりがちである。第三者から見たらどうなのか、井の中の蛙にならない工夫も必要と感じた。

一方で課題は残った。自己評価チェックシートの書式作成に携わった保育士には、その経緯も含めて言葉の意味や脈絡を踏まえて回答できたが、そこに携わらなかった職員にとっては理解できる言葉だったのかどうか疑問を呈する感想が見られた。また、高評価になりがちになるという意見も見られた。着眼点に照らしての自己判断であるがゆえに、向き合い方が厳しめか甘めかによって個人差が出るのはやむを得ないだろう。だからこそ、職員相互の対話は大切であり、それを通じて自身の評価の位置づけを見直すことになる。

5. まとめに代えて―「対話」を通じた同僚性の涵養

仁愛保育園の園内研修では、全体的な計画の作成から始まり、自己評価チェックシートの作成に取り組んだ。「ガイドライン」において、「対話」が重視されているとおり⁽⁵⁾、作成の過程では、自分たちはどういうことを大切にして保育したいかという問いが繰り返され、職員間で子どもや保育について語り合ったことは、各保育士が自園の保育の理念・方針を再確認し、園全体の保育の内容に関して認識を深める機会となったといえる。その思いは、【基準1】を中心に、評価項目や着眼点に表現する形になったが、全部を表すことはできなかった。

しかしながら、保育の様子は変化してきた。具体的には、生き物・制作・音楽リズムなど子ども達が大好きな遊びに対して、魅力ある環境を工夫するための話し合いが行われ、クラスの保育士同士が、その日その週の活動に見通しがもてるように計画を確認し合っている。主体性を大切にする保育の手立てを話し合い、子どもが自分で考える機会を作るような声掛けを意識したり、子どもの言葉を大切にし、耳を傾けるようになってきた。また、【基準3】に評価項目を設けたように、異年齢交流をすることで、別の角度からアドバイスをもらえることも増えた。「連続性を大切に環境構成していくことが難しい」などと日頃漠然と思っていたことを明確にすることもできた。このように、自己評価の項目があることで、普段何気なく行っている保育の中にどのような意味があるのか、また、何を大切にしていきたいかが明確になり話し合いもしやすくなった。

また、今回の自己評価は、非常勤の保育士にも振り返りができる内容となっていたことは良かったと思われる。その結果を常勤保育士が見て、「非常勤の保育士は、より丁寧にサブとして子どもと接してくれていると感じた」、「非常勤の保育士がよく考えながら保育してくださっていることが伝わってきた」と受け止められた。こうした「対話」を通じて、他の職員や非常勤保育士の思いに触れられたことは、同じクラスの保育士同士での共通理解の大切さを確認することにつながり、同僚性の意識を培うようになったと思われる。

時間が過ぎると自己評価チェックの際の項目から受けた刺激も薄れていくので、この自己評価のチェックは定期的に行っていくことが大切であろう。職員同士でじっくりと話し合う時間を確保するのが難しい現実もあるが、対話する意識や時間を大切にしていきたい。すでに保育士から

は、「仏教行事の内容も示してあるとより分かりやすい」という意見が出されている。今後さらに、評価の負担との兼ね合いで評価項目を増やすかどうかを検討しなければならない。園内研修では、こうした評価をめぐる課題の解決に向けて、職員相互の対話の継続が大切であることを確認し、それを通じて自身の評価の位置づけを見直していくこととした。

仁愛保育園では、次のステージとして、「保育所(組織)による自己評価」を設計している。さらに、「ガイドライン」に記載のあるように、「多様な視点を取り入れ活用する取組」として保護者アンケートを作成し、試行もした。「保育所(組織)による自己評価」を意義あるものにするために、保育士の自己評価や保護者アンケートをどのように園の運営に結びつけていくかは検討の途上であり、稿を改めて報告したい。

引用文献

- (1) 厚生労働省「保育所における自己評価ガイドライン（2020年改訂版）」（令和2年3月） <https://www.mhlw.go.jp/content/000609915.pdf>
- (2) 汐見稔幸監修『保育所保育指針ハンドブック2017年告示版』，学研教育みらい，2017年，p.38
- (3) 厚生労働省編『保育所保育指針解説』，フレーベル館，2018年，p.54
- (4) たとえば，保育者のための自己評価チェックリスト編纂委員会 代表 民秋言『保育者のための自己評価チェックリスト＜2017（平成29）年告示対応改訂版＞』（萌文書林，2019年）や保育総合研究会監修『平成30年度施行保育所保育指針に基づく自己チェックリスト100』（世界文化社，2018年）が刊行されている。
- (5) 前掲「保育所における自己評価ガイドライン（2020年改訂版）」p.5

【資料】

仁愛保育園の自己評価チェックシート

*各評価項目に対し①～④または④の着眼点を参考に4段階でチェックしてみてください。

- A:よく当てはまる・・・着眼点がすべて○
- B:やや当てはまる・・・着眼点の1つが×
- C:あまり当てはまらない・・・着眼点2つが×
- D:ほとんど当てはまらない・・・着眼点のすべてが×

【基準1】 保育の理念・方針について

1. 子どもの人権に配慮し、子ども一人一人の人格を尊重して保育を行っている。	A	B	C	D
--	---	---	---	---

- ① 子どもとかわわる際、一人ひとりの思いや願いを受け止めるように心がけている。
- ② 一人一人違うということを認め、子どもが安心して自己発揮できるようにかわわっている。
- ③ 子どもが自分らしさや自分の思いを素直に表現できるように、かわわっている。
- ④ 日頃から自然に「ありがとう」と言葉にすることを大切にしている。

2. 命の大切さ、命のつながりにながりに気づける働きかけを行っている。	A	B	C	D
-------------------------------------	---	---	---	---

- ① 仏教行事を通して、命の大切さを伝えている。
- ② 基本的な生活習慣や食生活が心身の健康につながっていることを伝えている。
- ③ 小動物の飼育や植物の栽培を通して、命あるものをいたわり大切にすることを伝えている。

3. 人への優しさや思いやり、感謝の心を育む保育を行っている。	A	B	C	D
---------------------------------	---	---	---	---

- ① トラブルになっている場面での対応や困っている友達への対応を、子どもと一緒に考える場をもっている。
- ② 友達の良いさや相手の気持ちに気づくような、働きかけを行っている。
(例えば自分と違う相手がいって同じ思いとは知らないという事を知らせている)
- ③ 絵本や紙芝居などの視聴覚教材を通して、「思いやり」「親切」とはどういうことかを年齢に合わせた話し合う機会をもっている。

4. 子どもが快適に、健康で安全に過ごすことができる環境づくりと働きかけを行っている。＜生命の保持＞	A	B	C	D
--	---	---	---	---

- ① 一人一人の子どもの平常の健康状態や発育及び発達状態を的確に把握し、異常を感じる場合は速やかに適切に対応している。
- ② 清潔を保ち、明るさ、湿度、温度などに配慮している。
- ③ 子どもの行動を予測し、環境に留意して事故防止に努めている。

5. 情緒の安定を育む働きかけを行っている。＜情緒の安定＞	A	B	C	D
-------------------------------	---	---	---	---

- ① 子どもを温かく受け止め、受容的・応答的に関わりながら、愛着関係を大切にしている。
- ② 子どもが安心感をもって、くつろいで過ごせる環境づくりを行っている。
- ③ 子どもの自己肯定感を育む働きかけを行っている。

【資料】

【基準2】 指導計画について

1. 指導計画（月・週）は、保育所保育指針、本園の全体的な計画、年間指導計画を踏まえ、子どもの実態や地域性などを考慮しながら作成している。	A	B	C	D
---	---	---	---	---

- ① 子どもの発達過程を見直し、養護と教育の一体の観点から子どもの体験する内容を具体的に設定している。
- ② 家庭生活との連続性や季節、行事との関連性、地域の特徴などを考慮して作成している。
- ③ 活動が断片的にならないよう、子どもの興味・関心・意欲をもとに、繋がりを大切に作成している。

2. 指導計画を適切に立て、計画に基づいて保育を進めている。	A	B	C	D
--------------------------------	---	---	---	---

- ① 1日の流れや子どもの生活、遊びの連続性に配慮した保育を行っている。
- ② 計画に基づきながらも、子どもの発想など状況に応じて柔軟な対応を行っている。
- ③ 行事やその準備は、子どもの実態や思いに即し、子ども主体を心がけて行っている。

3. 指導計画を踏まえて定期的に振り返りを行い、評価と課題を明らかにしている。	A	B	C	D
---	---	---	---	---

- ① 保育の振り返りを記録したり、担任間等で話し合い、保育の状況や子ども一人一人の特徴を捉えるようにしている。
- ② 日案、月案等で、子どもの姿を捉える視点と保育士の視点の双方で反省課題を記入している。
- ③ 指導計画の反省、評価から改善点をみつけ、次の指導計画作成に反映させている。

【基準3】 保育内容及び環境の構成について

1. 子ども一人一人の理解に努め、一人一人の発達の特徴に応じた保育を適切に行っている。	A	B	C	D
---	---	---	---	---

- ① 子どもの性差や個人差に留意しつつ、一人一人の子どもの気持ちを受け止め、関わるようにしている。
- ② 何に興味や関心をもっているか、得意なこと、つまずいていることは何かを理解し、一人一人に適した保育を行っている。
- ③ 保育士の決めつけや思い込みをもとに子どもを見ることがなく、一人一人の子どもの姿を理解するよう努めている。

2. 子ども一人一人を大切に、信頼関係を築いている。	A	B	C	D
----------------------------	---	---	---	---

- ① 子どもの話を聞くときは、ゆったりとした心もちで耳を傾けている。
- ② 子ども一人一人の行動や思いを尊重し、願いや期待をもって見守ったり、励ましたりしている。
- ③ 家庭の状況を考慮し、その子どもや保護者の思いを受け止めながら保育している。

【資料】

3. 子どもの主体性を尊重しながら保育を行っている。

- ① 活動の中で子どもが自ら選択できる場面を取り入れる工夫を行っている。
- ② 子ども一人一人が見通しをもって生活できるように、必要なことをどの子どもにも分かりやすいように、視覚的に提示するなど工夫している。
- ③ 担任の指示が多くならないように留意しつつ、子どもが試行錯誤しながら取り組む時間を大切にしている。
- ④ 子どものやりたいという思いを尊重し、子どもの考えや発想を取り入れながら保育を行っている。

4. 年齢に応じた基本的生活習慣やきまりが身に付くように援助している。

- ① 生活に必要なきまりやマナーの意味を知らせ、具体的な方法を分かりやすく伝えている。
- ② 子どもが自分で気付けるように、良いことと悪いことについて、状況に応じて子ども同士あるいは子どもと保育士と一緒に考えるようにしている。
- ③ 家庭での生活体験に配慮し、子どもにも生活に必要な習慣を丁寧に伝えるとともに、保護者とも共通理解を図るようにしている。

5. 保育の内容・方法について他の保育士等と意見交換を行っている。

- ① お互いの保育を見たり、手伝う機会を作っている。
- ② 日頃から保育の方法や内容について、園長・保育士・栄養士等と意見交換し、良い点や改善点を伝え合っている。
- ③ 園長・主任・副主任・同僚等と相談したり意見を求めたりしている。

6. 異年齢の子ども同士との交流をはかり、互いに育ちあえる保育を行っている。

- ① 異年齢児と一緒に過ごしたり交流したりする時間と機会を意図的に設けている。
- ② 年下の子どもへのいたわりや思いやりの気持ち、年上の子どもに対する憧れをもてるよう、互いに育ちあえる働きかけをしている。
- ③ 異年齢の子ども同士で遊びを楽しめるよう、必要に応じてルールの調整を提案するなど、適切な仲立ちを心がけている。

□ 乳児保育【3項目】

1. 子どもが安心して過ごせるように自らの言葉づかいや表情に留意して、応答的・受容的な関わりをしている。

- ① 子どもの体の動きや表情、声や囁語などから、子どもの欲求を読み取り、タイミングよく表情豊かに丁寧に応え、子どもの心を受け止めている。
- ② 子どもに生理的欲求が満たされるよう一人一人の生活リズムを大切にし、個人差や興味、関心に合った環境を整えている。
- ③ 生活や遊びの中で、クラスの誰に対しても身近な人の存在に気付き、親しみがもてるように仲

【資料】

立ちをしている。

2. 保護者と連絡を密にして、子どもの状況に応じた保育をしている。

- ① 家庭での生活状況（食事・排泄・睡眠等）の様子を連絡帳で確認したり送迎時に丁寧に聞き取りしたりし、状況に合わせて保育をしている。
- ② 子どもの姿や成長発達を、その日の出来事を織り交ぜながら、詳しく伝え、共に喜び合っている。
- ③ 送迎時には気持ちよい挨拶をし、育児の不安や悩みなどを伝えやすい雰囲気作りをしている。

3. 乳児保育に関わる職員間の連携や嘱託医、またはかかりつけ医との連携をとるようにしている。

- ① 授乳や離乳については必要に応じて栄養士やかかりつけ医と連携し、子どもの健康状態を見ながら一人一人の状態に合わせて保育している。
- ② 午睡時には窒息リスクの除去や咳をしている子への配慮などをして、安心安全に眠れる環境を整えている。
- ③ 成育歴や発達過程における個人差を踏まえ、発達に即した生活と遊びが行えるよう必要に応じて職員間で話し合いや引き継ぎをしている。

□ 3歳未満児の保育【4項目】

1. 子どもの自我の育ちを受け止め、適切なかかわりをしている。

- ① 子どもの気持ちを尊重し、思い通りにならない感情に対して十分に時間をかけて、受容的に受け止めている。
- ② 子どもの気持ちに寄り添って「○○したかったね」と気持ちに共感する声かけをしている。
- ③ 子どもの自我の育ちを見守り、気持ちを代弁したり、納得のいく解決の方法を提案したりして、自ら考えてみようとする気持ちがもてるようにしている。

2. 探索活動が十分に行えるような環境を用意している。

- ① 子どもが自分なりの発想や工夫で楽しむことができるよう、発達の状態に即した玩具等を用意し、配置している。
- ② 探索するための時間と空間を保障している。
- ③ 様々な遊具や用具、素材などを用意するとともに、衛生面や安全面の配慮をしている。

3. 食事・衣類の着脱等、生活習慣の自立に向かうよう適切に援助している。

- ① 自分でやりたいという気持ちを受け入れ、子どものペースに合わせて援助している。
- ② できた時に一緒に喜び、自信や達成感を味わうことを大切にしている。
- ③ 子どもが自分でしようとすることに對しての意味や保育園での対応の仕方を伝え、保護者との相互理解を図るようにしている。

【資料】

4. 友達への興味や関心が高まり、関わりがもてるよう援助している。
- ①

友達と一緒に過ごすことの喜びや一緒に遊ぶことの楽しさを感じられるように配慮している。
- ②

相手にも思いがあることに気付くことができるよう仲立ちしている。
- ③

友達との遊びの中でけんか（トラブル）が起きた時、適切な行動や伝え方があることを知らせている。

□ 3 歳以上児の保育【5 項目】

1. 集団の中で一人一人の子どもが自分の力を発揮できるように配慮している。
- ①

一人一人の子どもに思いを寄せ、目に見えない心の声を聴き、子どもの内面を理解しようとしている。
- ②

ありのままの姿を認め、子どもとの信頼関係を基盤に、子ども達が自信を持って行動できるようになっている。
- ③

子ども達一人一人がお互いを認め合い、自己を発揮できるクラス作りをしている。
2. 友達と協力して取り組める遊びや活動が展開できるように環境を整えている。
- ①

子ども達が共通の願いや目的を持って遊ぶ中で、工夫したり協力したりする楽しさを十分に味わえるように、場やモノの配置を整えている。
- ②

子ども達の作品を紹介したりみんなで相談したりする場を設けて、お互いの思いや考えに触れられるようにしている。
- ③

友達とイメージを共有したりアイデアを出し合ったりしながら、活動を発展させていく楽しさを味わえるようにしている。

3. 子どもの知的興味や関心が高まるような環境の工夫や働きかけを行っている。

- ①

子ども達が親しみや興味をもって、積極的に関わられるように意図的・計画的に環境を構成している。
- ②

自然に直接かかわる機会を多く持つようにし、自然の恩恵や事象を取り入れられて遊べるようにしている。
- ③

物の性質や仕組みに興味を持ち、それらについて探求できるように、環境の工夫や働きかけを行っている。

4. 遊びや生活を通して、友達とのかかわりが深まるように援助している。

- ①

互いの良さや一緒に遊ぶことの楽しさがをもてるよう、それぞれの友達の良いところを伝えていく。
- ②

その都度、自分の思いを伝えたり、友達の思いを聞いたりできるように仲立ちしている。

【資料】

- ③

個別の支援が必要な子との生活を通して、お互いがクラスの仲間として関わりが深まるようにしている。

5. 豊かな心とたくましく強い体を育てる工夫をしている。

- ①

人とのかかわりの中で、嬉しい・楽しい・悲しい・怖いなどの多様な感情体験を大切にしている。
- ②

子どもの気持ちを肯定的に受け入れ、自己の存在感や充実感を味わえるように、子どもの意欲を育むようにしている。
- ③

身近な自然の事物や事象と関わる中で、進んで体を動かそうとする意欲が育つような環境を工夫している。

【基準 4】 子どもの健康と安全

1. 日頃から子どもの心身の状態、発育状態を把握している。

- ①

子どもの心身の状態をきめ細かに確認し、平常とは異なった状態を速やかに見つけ出すため随時、子どもの健康観察を行っている。
- ②

子どもの日常の言動や生活の様子を丁寧に観察し、心身の機能や発達の特徴を考慮し、安易に予測や判断しないようにしている。
- ③

保育中の子どもの心身の状態や発達状態（身長・体重等）について、必要に応じて保護者に報告し、家庭と連携している。

2. 子どもに健康への関心を促し、病気の予防に必要な働きかけを行っている。

- ①

子どもが安心して過ごせるよう園内の保健的環境に留意し、状況に応じ適切に対応している。登園の際は家庭における健康状態を尋ね、健康カードの記入を確認してその子に合った対応をしている。
- ③

様々な機会に視覚教材を用いて、生活の仕方や予防の仕方を知らせ、必要な生活習慣が身に付くようにしている。
- ④

健康診断や体位測定などの機会を通して、成長を喜んだり自分のからだに関心をもったりできるようにしている。

3. 食への興味・関心を高め、楽しく食事ができるよう心がけている。

- ①

親培を通して収穫を楽しむ、野菜への関心を高め、感謝の気持ちをもって楽しく食することを大切にしている。
- ②

ゆとりのある食事時間を確保するとともに、食事の空間（環境）はくつろぎのある場となるように配慮している。
- ③

一人一人の発達に応じて食品の種類・量・大きさ・固さ・食具等を配慮し、食に関わる体験が広がるよう工夫している。

【資料】

4. 子どもの健康保持と安全に留意して活動を行っている。 A B C D

- ① 安全確保のためにリスクを把握し、事故防止チェック表を活用し、点検を行っている。
- ② 日常的な遊びや運動遊びなどを通して、体力作りができるよう工夫している。
- ③ 保護者の理解と協力を得ながら、睡眠・食事・遊びなど、1日を通した生活リズムを整えられるようにしている。

【基準5】 子育て支援・家庭との連携

1. 保護者との対応に際しては、保護者の気持ちを受け止めるように心がけている。 A B C D

- ① 送迎時における対話、連絡帳、懇談など様々な機会を捉え、コミュニケーションを図っている。
- ② 保護者の相談の際には、傾聴し受け止めるようにしている。
- ③ 家庭の実態や保護者の心情を把握し、保護者の不安や悩みに寄り添い、安心できるようにしている。

2. 子どもの日々の様子や保育の内容等について保護者に説明している。 A B C D

- ① 生活や遊びの中に様々な学びがあることを、連絡帳や対話を通して伝えている。
- ② 保育の意図や内容については、掲示物やお便りや写真を通して伝えている。
- ③ 保育の意図を理解できるように保護者に説明し、疑問や要望（苦情）が出てきた場合には、面談の時間を作り誠実に伝えている。

3. 保護者が子どもの成長に気付き、子育ての喜びを感じられるように働きかけている。 A B C D

- ① 保護者と懇談会を通して同じ目標をもちながら、経過や取組を伝え合い、共に喜び合えるように心がけている。
- ② 子どもを深く理解する視点を伝えたり実践を示したりして、良い手立てを伝えている。
- ③ 見通しをもって子育てできるように、対話を多くもつようにしている。

4. 保護者に育児不安が見られる場合や不適切な養育が疑われる場合には、園長に報告している。 A B C D

- ① 家庭の状況や問題を把握していくよう意識して対応している。
- ② 園長に報告・相談し、子どもの発達および内面についての理解と保護者の状況に応じた支援を行うようにしている。
- ③ 不適切な養育が疑われる場合は、家族の関係に気を配りながら、保護者との情報交換を密にし、事情を確認するようにしている。

令和4年6月作成